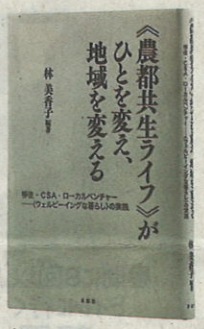
2023年（令和5年）4月2日（日曜日）　北海道新聞

ほっかいどう

《農都共生ライフ》がひとを変え、地域を変える　林美香子編著

農村と都市 共存共栄のヒント



寿郎社　2420円

本書は、「農村の地域づくりには個別施策ではなく、農村と都市の共生という視点からの複合的、総合的施策が重要だ」と長く訴えてきた著者による、力強い提言の書だ。自らが調査した多くの先進事例とともに、地域支援型農業（CSA）の実施手法として取り組んだ農村と都市の共生の実践に向けた多くのヒントが盛られている。

コロナで多くの人々が在宅勤務やテレワークを経験したことで、働き方が大きく変化した。その背景には、幸せな働き方を希求する人々の意識があるようだ。大都市のオフィスにリアルに通わなくても仕事ができた体験は大きい。さらに、地方での快適な生活での労働は生産性の向上にもつながる可能性がある。東京から後志管内ニセコ町に本社を移したルピシアの水口博喜会長から「これからの労働は創造的な活動が主になる。創造的な発想は地方の自然のなかでこそ磨かれる」と聞いたことがある。

農村と都市がさまざまな形で共生しながら、地域の力を高めていく動きの予兆といえるだろう。本書からは、それを実現するための多くの手がかりが見つけられる。

私は、本書の事例にある岡山県の西粟倉村を10年前に訪れたことがある。その頃、西粟倉村は林業再生の事業立ち上げに向けてクラウドファンディングを立ち上げていた。当時としては画期的な資金調達手法が、山奥の小さな村で挑戦されていることに興味を持ったのだが、本書では、現在はそこに30社のローカルベンチャー企業が出現し、しかも、その動きは胆振管内厚真町にまで伝わってきていることが丁寧に紹介されていた。

挑戦には多くの先行事例を知り、そこから学ぶ姿勢が大切だ。ぜひ、本書を読んで意欲を高め、実践への示唆を得てほしい。

（小磯修二・北海道文教大学地域創造研究センター長）